

「会津一五〇テスト」

得点 点

問.次の文書の____には数字を、()には適当な語句を□から選び、かきましよう(語句は使用しないものや2度使うものもあります)。

【会津戦争編】

1868(慶応4)年1月3日、会津藩・桑名藩を中心とする幕府連合軍が、薩長連合軍と京都の鳥羽・伏見で激突。多数軍勢であったはずの幕府連合軍でしたが、新式銃砲などを使う薩長連合軍に敗戦しました。

- ① 将軍・()、会津藩主・()は大阪から海路で江戸へ敵前逃亡。会津藩最大死者____人ともいわれ、会津藩の家老であった()を失ったことも大きな損失でした。
- ② 新政府軍を迎撃するために会津藩を中心として編成された()は、()で新政府軍を迎え撃ちましたが、短時間で敗北。その後、会津若松城が攻撃され、()が終了します。
- ③ 会津藩士たちは、会津戦争後に、東京へ()=捕虜 という扱いで各所に幽閉されました。屈辱的な幽閉に耐えた理由は「()」「()」という思いからでした。

神保修理 藩主の助命 松平容保 奥羽列藩軍 白河口 会津降伏人 会津藩の再興 会津戦争 徳川家康 徳川慶喜

【北海道・小樽編】

会津戦争による会津藩解体のため、旧会津藩士約1万7000人のうち、1万2000人の藩士を蝦夷地へ移住させる計画がすすめられました。

- ① ____年、東京謹慎中の会津藩士の蝦夷地行きがまじります。この年の8月には蝦夷地から()へと名称が変更されました。
- ② 旧会津藩士103戸(約__名)が、品川から8日間の船旅で()に到着しました。しかし、到着後も兵部省の北海道からの引き揚げなどで落ち着き先が決まらない日々でした。
- ③ 藩士団は、当時の樺太開拓使であった()に願い、樺太開拓使の管理下に落ち着くこととなりました。しかし、その後、樺太開拓使も廃止となります。
- ④ 最終的に()への移住が開始されたのは、小樽上陸後1年半が過ぎた____年4月のことでした。

北海道 札幌 余市 小樽 黒田清隆 大隈重信

【北海道・余市入植編】

余市行きが決まった4月から先発隊が余市入りし、同年7月までに藩士とその家族の移住が完了しました。

- ① 移民団の隊長であった()を中心に、余市川上流の川東に4ヶ村()村)、川西に2ヶ村()村)が置かれて、開墾がはじまりました。
- ② 博物館には、()以下193名による、「新しい地で誠意をもって開拓に励む」と誓った文書()がのこされています。
- ③ 入植地には子どもたちの学問の場として()、武芸の鍛錬の場として()が設けられました。教科書を会津や斗南藩から取り寄せ、場当たり教育ではなくしっかりとした学校教育がなされていました。

宗川熊四郎茂友 黒川 山田 大川 御受書 炉辺夜話 日進館 日新館 講武館

【余市・りんご編】

当時の開拓次官・黒田清隆はアメリカから顧問としてケブロンを招き、明治8年、リンゴやナシ、サクランボなどの果樹の苗木を配布しました。

- ① 1879(明治12年)、旧会津藩士の()の木から19号(後の())6個、同じく旧会津藩士の()の木から49号(後の())7個が初めて収穫されました。____年に入ったあたりから、小樽港からロシアに輸出されました。
- ② 「緋の衣」という品種名は、幕末時に京都守護職を務めた会津藩主・()が()天皇からいただいた()の赤と、会津戦争終結の際、西軍に会津城を明け渡す式を行った場に敷かれた()の赤が、勤皇の心を持ちながら逆賊とされた会津の人々の心に深く刻まれていたからだといわれています。

松平容保 紅玉 赤羽源八 金子安蔵 国光 孝明 桓武 緋の衣 緋の御衣 緋の毛氈 緋の冠

「会津一五〇テスト」(※こちら側は答えです)

問.次の文書の____には数字を、()には適当な語句を□から選び、かきましよう(語句は使用しないものや2度使うものもあります)。

【会津戦争編】

1868(慶応4)年1月3日、会津藩・桑名藩を中心とする幕府連合軍が、薩長連合軍と京都の鳥羽・伏見で激突。多数軍勢であったはずの幕府連合軍でしたが、新式銃砲などを使う薩長連合軍に敗戦しました。

- ④ 将軍・(徳川慶喜)、会津藩主・(松平容保)は大阪から海路で江戸へ敵前逃亡。会津藩最大死者 120 人ともいわれ、会津藩の家老であった(神保修理)を失ったことも大きな損失でした。
- ⑤ 新政府軍を迎撃するために会津藩を中心として編成された(奥羽列藩軍)は、(白河口)で新政府軍を迎え撃ちましたが、短時間で敗北。その後、会津若松城が攻撃され、(会津戦争)が終了します。
- ⑥ 会津藩士たちは、会津戦争後に、東京へ(会津降伏人)=捕虜 という扱いで各所に幽閉されました。屈辱的な幽閉に耐えた理由は「(藩主の助命)」「(会津藩の再興)」という思いからでした。

【北海道・小樽編】

会津戦争による会津藩解体のため、旧会津藩士約1万7000人のうち、1万2000人の藩士を蝦夷地へ移住させる計画がすすめられました。

- ⑤ 1869(明治2)年、東京謹慎中の会津藩士の蝦夷地行きがまします。この年の8月には蝦夷地から(北海道)へと名称が変更されました。
- ⑥ 旧会津藩士103戸(約330名)が、品川から8日間の船旅で(小樽)に到着しました。しかし、到着後も兵部省の北海道からの引き揚げなどで落ち着き先が決まらない日々でした。
- ⑦ 藩士団は、当時の樺太開拓使であった(黒田清隆)に願い、樺太開拓使の管理下に落ち着くこととなりました。しかし、その後、樺太開拓使も廃止となります。
- ⑧ 最終的に(余市)への移住が開始されたのは、小樽上陸後1年半が過ぎた1871(明治4)年4月のことでした。

【北海道・余市入植編】

余市行きが決まった4月から先発隊が余市入りし、同年7月までに藩士とその家族の移住が完了しました。

- ④ 移民団の隊長であった(宗川熊四郎茂友)を中心に、余市川上流の川東に4ヶ村(黒川村)、川西に2ヶ村(山田村)が置かれて、開墾がはじまりました。
- ⑤ 博物館には、(宗川熊四郎茂友)以下193名による、「新しい地で誠意をもって開拓に励む」と誓った文書(御受書)がのこされています。
- ⑥ 入植地には子どもたちの学問の場として(日進館)、武芸の鍛錬の場として(講武館)が設けられました。教科書を会津や斗南藩から取り寄せ、場当たり教育ではなくしっかりとした学校教育がなされていました。

【余市・りんご編】

当時の開拓次官・黒田清隆はアメリカから顧問としてケブロンを招き、明治8年、リンゴやナシ、サクランボなどの果樹の苗木を配布しました。

- ③ 1879(明治12)年、旧会津藩士の(赤羽源八)の木から19号(後の(緋の衣))6個、同じく旧会津藩士の(金子安蔵)の木から49号(後の(国光))7個が初めて収穫されました。1897(明治30)年に入ったあたりから、小樽港からロシアに輸出されました。
- ④ 「緋の衣」という品種名は、幕末時に京都守護職を務めた会津藩主(松平容保)が(孝明)天皇からいただいた(緋の御衣)の赤と、会津戦争終結の際、西軍に会津城を明け渡す式を行った場に敷かれた(緋の毛氈)の赤が、勤皇の心を持ちながら逆賊とされた会津の人々の心に深く刻まれていたからだといわれています。